

新撰女大學

野中千代子

人の世にあるみな身を修め家を治むるをつとめとす古きことばに國の本は家にあり家の本は身にありといへり身をたまらざれば家ど、

のはず家ど、のはざれば國

さかんならずされば身をささむるは扇にかなめあるが如く車に軸あるが如し

凡そ女子のつとめは家をと

どのふるにあり故にまづ女

徳とて心さま正りして善なるべしとげあるばらも香あるがゆゑに人にめでらるるれば女子は顔かたちみにく

くとも心さま正りして善ならんやうつとめはげむべし

いにしへの文にも人みな其の形をかざる事をしりて其の性をかざる事を知ること

なしと見えたり性をかざるとはいつはりかざるにはあ

らず心さまのあしきところ

をあらためてよくするをい

ふなりおこたらずよき道に

ならはばなごかよき人とな

らざらんや女徳とは一に貞

操二に温順三に儉約四に恭

謹五に親切六に寛容七に仁

愛八に忍耐九に和樂十に勤

勉をいふ

第一貞操の事

貞操とは心さまいさぎよく

操正りしてかたく節義をま

もるをいふかりそめにもた

はれたる行ひあらば身をい

たづらにすて名をけがし父

母夫兄弟にはぢをあたへ人

につまはしきせられんこと

まことに口をしくあさまし

温とはにうわにしてあはれ

みの心あるをいひ順とはす

なほにしてみだりにさから

はざるをいふ温順ならざれ

ば心たけくけしきけうとく

ことばあらゝかにして人ど

あらそひ又は人ををしりわ

れ人にまさりがほにしてい

とおどましくにくしされば

女子は志とやかにしてなご

けふかく温順の徳をみかく

べし

第三儉約の事

儉約は家をたもつの道なり

をこらざるやぶさかならずつ

づまやかにしてほしいまゝ

どわが身の分にごえずかた

はら衛生の道にかなへるを

えらぶべしみだりにかざり

をなし分にごえたるを好む

べからず心は身の主なりた

ふとおべし衣服調度は身に

つくものにしてかろし心を

かざらずしていたづらに衣

服調度をかざり人にほこる

は卑むべきわざなりつゝし

むべし

第四恭謹の事

恭謹とはかたち正しく禮儀

をまもり何事にも深く心を

用るあやまりなからんやう

身をたもつをいふ婦人女子

のをりく外に出て見聞を

ひろうし禮節をつとむるは

もまたげなしといへども席

の正しからざるはつとめて

さぐべし又淫聲をよるこび

て淫樂をならふべからず是

れ女子の心をとらかすもの

なりおぞるべし凡を身た

しからざれば家に禮儀なく

風俗みだりにして淫行多く

家風をけがし禍におちいる

べしされば衣服飲食器具な

べし

第二温順の事

温とはにうわにしてあはれ

みの心あるをいひ順とはす

新撰 女大學 (明治三〇年)

さればかねて身をつゝしみて悪事をふせぎいましむべし悪事出来てのちいましむるはおとし古きことばにつしめば禍にかつといへり身をつゝしめば禍のおこるひまなしつとむべし

第五親切の事

親切とは人の爲めに心をこめてまことをつくすをいふおよそやめるをいたはりくらしめるをすくひたすくるはまことの人のなすべきつとめなり人もし我を愛せずしてそしりにくむともいかりうらむることなかれ誠を以て感ぜしむれば後は必ず其の人の心やわらぎてわれ

をいつくしむに至るべし天道はかへすことをこのむといへり善には自らさいはいあり悪には自らわざはいありされば年をへて久しく善を行へばつもりてさいはいはひ来りなん樂しむべし積善の家に餘慶ありおこたるべからず

第六寛容の事

心ひろくゆたかにして人の言を聴きいれ物事にせまらずいからざるをいふ凡そわが心にかなほざる事ありとても顔色をほげしくしことばをあくしくしていかりの、しれば人々うらみをむきて禍のもととなるいましむ

べし心やわらかなれば其の色必ず外にあらはれ内にいかりあれば其の色亦外にあらはるつゝしむべし我過なきをいひたて、逆らひあらそへば重ねて告げきかする人なしさればたとひ人我過を告げたるに其の言あたらずと思ふともみなうけい

第七仁愛の事

仁愛とは人をいつくしみあはれむをいふ凡そ父母に事ふるに孝行をつとむべきはいふも更なりあまねく人をよるこびたのしましめてこそ我こゝろも樂しむべけれ人のうれひをかへりみずし

て我ひとりたのしむはよからずされども愛におぼるれば人をごりあなごりてつしまずこれ愛するにあらずしてかへつて人をそこなふなり必ずおごそかに正しく愛すべし

第八忍耐の事

忍耐とはこらゆるなり物事に堪忍するをいふ凡そ世の中はわが心にかなほざる事多しと知るべし之をかんんせざれば火と交はるにやはらかならずして智しきをひろむるにたよりなかるべし

て慾をほしいまゝにせざるもこらゆるなり萬の業をなすも苦勞を堪忍して其のわざをつとむるより成就せりむつかしきを堪ゆれば天下の事何ごともなすべしと古の人もいはれたり守るべし

第九和氣の事

女子は和氣をうしなはず心

のびやかにのごかなるべし内に和氣あるものは外必ずよるこべる色ありされば常に顔色をやはらげてことばをあらゝげず人の心をよろこばしめ家内をも調和して春の日のうらゝかなるが如くならしむべしかこちがほなるはあしくはらたゝしげ

第十勤勉の事

なるもあし、古き語に父子志たしむ兄弟和し夫婦たしきは家のこえたるなりといへりもし三親和せずんば富めりといへども家のやせたるなり法とすべし

凡そ物各つとめあり犬の夜をまもり鶏のときを司るも亦つとめなり禽獸すら猶かくのごとしいはんや人をや女子のいまだかしづかざるものはよく文をよみ藝をならふべしひまあらば父兄につかへて其の勞にかはるべし妻となりては舅姑につかふることまことの父母の如くするはいふも更なり夫を

助け子をたて家事をつとむる心がけきはめて大切なりひまあらばなほ文よむことをわするべからずかくの如くつとむれば常に心にいとまなくしてひが事を行ふべきひまなし女子の行をけがし身を傷ふはいとま多くしてすべきわざなきによる

もの多したとべはせ行く馬は人をふますたゝずむ時かへつて人をふむが如し是れ足にいとまあるによる人の志わざは世と共に益あげしゆだんなくつとむべし此の拾條は女子の守るべき道なりおよそ家の盛衰は家政のこゝのふるを盛とし家政のこゝのはざるを衰とす

富貴なりとて盛とすべからず貧賤なりとて衰とすべからずされば家の盛衰は家政のこゝのふとこゝのはざるにあり女子は家を治むるを以てつとめとす其の責はなほた重し志ばしも之れをわするべからず

新撰女大學